

# 共同研究の経緯と概要

日高 薫

## 1 目的

本書は、国立歴史民俗博物館が、一九九六年度から一九九八年度にかけて実施した共同研究「つくり物」の総合的研究」の報告書である。

「つくり物」とは、儀礼・祭礼の際に、飾りもの・見せものとする目的で造られる人工的な造形物をさす。種々の人形や物を趣向をこらして配置した洲浜や、山車・山鉾などの上に飾られる山に見立てたつくり山、造花、つくり枝など、「風流（ふりゆう）」の語で表される飾りものから、能の道具立てである舟・山・宮・釣鐘などの舞台装置など、古代から現代に至るまで、階層を問わず多彩な展開が見られる。

「つくり物」の語は、「作」「造」の漢字をあてて、古代から文献上に類繁に登場しており、とくに貴族社会における歌合行事のような文化的催事や、儀式などの飾りものとして発展したことがうかがわれる。その思想的背景には、道教・仏教など外来の思想に加えて、民間信仰がからみあっていると考えられ、早い時期から、民衆の間に広まり、多彩な展開を示していることが注目される。

このように幅広い階層において発達したつくり物の文化は、したがって、多種多様であり、その定義や分類もあいまいなままにおかれているのが現状である。また、つくり物に関する研究は、芸能史や文化史の分

野を中心に行われてきたが、従来の研究においては、個々の祭礼行事を構成する一要素としてつくり物に言及する例が多く、個別研究にとどまっていたと言わざるを得ない。

当該領域の研究がはかばかしい発展を遂げなかった原因の一つは、従来の研究分野の境界にあたる領域に位置していた点にある。芸能史研究においては、祭礼自体の流れや、現象としての風流、すなわち踊りや音楽などの側面がとくに注目され、物質的要素にはあまり注意が払われてこなかった傾向がある。一方、美術史においては、従来、西洋美術史の枠組みにおける、ハイアート・ローアートのヒエラルキーが支配的であり、「美術」の範疇に含められないつくり物が研究対象となることはほとんどあり得なかった。原則として造り棄てられる運命にあるつくり物の遺品の乏しさも、研究を極めて困難にしてきた。

本研究は、これら多岐にわたるつくり物の歴史を、美術工芸史・芸能史・民俗学・文化史などの視点から総合的にとらえ、当該領域の研究の端緒とすることを目的として開始された。その源流や思想的背景、造形的特質と時代の変遷、地域的展開、外国（中国・西洋）におけるつくり物との比較などの諸問題を解明し、同時に、従来あいまいであった「つくり物」の定義と分類を試みるのが当初の目的に掲げられている。

つくり物は、一般民衆におよぶ広い階層において、古代から現代にわ

たる長期間続いてきた文化であり、民衆の歴史を主な研究テーマとして掲げてきた国立歴史民俗博物館が共同研究の課題としてとりあげた意義は深い。三年間という研究期間は、幅広い問題を総合的にとらえるには短く、当初の目的を達成したとは言いが、今後の研究の展望と問題点を提示する役割は果たせたのではないかと思う。

## 2 研究組織

相蘇一弘	大阪市立博物館
泉 万里	神戸市看護大学
稲城信子	元興寺文化財研究所
植木行宣	立命館大学文学部
加藤悦子	玉川大学文学部
木下直之	東京大学総合研究博物館
坂本 満	聖徳大学人文学部
佐野みどり	成城大学文芸学部
玉蟲敏子	静嘉堂文庫美術館
辻 惟雄	千葉市美術館
東野治之	大阪大学文学部
服部幸雄	千葉大学文学部
福岡裕爾	福岡市博物館
安村敏信	板橋区立美術館
山本祐子	名古屋博物館
米田 実	水口町立歴史民俗博物館
橋本裕之	国立歴史民俗博物館民俗研究部
日高 薫	国立歴史民俗博物館情報資料研究部(研究代表者)
福原敏男	国立歴史民俗博物館民俗研究部
丸山伸彦	国立歴史民俗博物館情報資料研究部

## 3 経過

(所属は、一九九八年度現在)

【一九九六年度】  
第1回研究会 一九九六年六月二十二日 国立歴史民俗博物館

日高 薫 「共同研究の課題と意義」

辻 惟雄 「風流の「作り物」―その展開について」

討論 「つくり物研究の現状把握」

第2回研究会 一九九六年九月二十二日～二十三日 富山県福岡町ほか

植木行宣 「風流拍子物と山鉾の祭り」

泉 万里 コメント

木下直之 「つくり物の近況報告」

現地見学 富山県福岡町の「つくりもん」

第3回研究会 一九九七年三月十五日 国立歴史民俗博物館

稲城信子 「仏教法会とつくり花」

佐野みどり 「風流作り物」

東野治之 コメント

### 【一九九七年度】

第一回研究会 一九九七年十一月十五日 国立歴史民俗博物館

福岡裕爾 「祭りにおけるかざりの伝播」

東野治之 「大嘗会のつくり物」

第二回研究会 一九九八年一月三十一日 国立歴史民俗博物館

泉 万里 「鍾馗と鹿馬 月次祭礼図模本(東博蔵)に

みえる風流について」

米田 実 「近世近江の曳山と作り物について」

第三回研究会 一九九八年三月七日 国立歴史民俗博物館

山本祐子 「近世名古屋のつくり物」

相蘇一弘 「近世大坂のつくり物」

【一九九八年度】

第一回研究会 一九九八年七月四日 国立歴史民俗博物館

橋本裕之 「花笠のドラマトゥルギー」 田楽法師のプ

ラクティス」

木下直之 コメント

福原敏男 「練物の話」 岡山東照宮祭礼の祭礼練物」

第二回研究会 一九九八年九月十二日～十四日 花巻市・盛岡市・青森

県三戸町

現地見学 岩手県花巻市の花巻祭

青森県三戸町の三戸祭

岩手県盛岡市の盛岡祭

第三回研究会 一九九九年三月二十七日～二十八日 国立歴史民俗博物

館

安村敏信 「織られた絵」

木下直之 「戦争のつくりもの」

日高 薫 「置物とつくり物」

坂本 満 「プレセピオのつくり物」

加藤悦子 「竹の風流」

玉蟲敏子 「茗藎の飾りもの」

4 成果

つくり物に関しては、従来、文化史、芸能史、民俗学などの研究者によつて研究が進められてきたが、いずれも個別分野の範囲内にとどまっていた。また、つくり物は、精巧な細工をともなう造形物であるため、美術工芸史の分野との関連もきわめて深いが、つくり物のもつ仮設的な性格、すなわち作つてすぐに取り壊されてしまうという性格に起因して、

遺品に乏しく、実物資料の観察を重視する美術史の研究対象とされることはほとんどなかった。

そこで第一回の研究会では、それぞれの研究分野におけるつくり物研究の現状を確認しあい、従来の研究における問題点を整理した。その結果、(1) 古代から中世におけるつくり物の起源と展開、(2) 近世都市の発達とつくり物の変容 (3) 東アジアの視点から見つくり物、(4) 従来のもつくり物研究の限界と今後の実証的な研究の必要性などの問題が明らかとなった。

以後の研究会は、これらの問題点のいずれかをふまえたうえで、各研究分野の立場からの発表を行い、これに対して異分野の研究者がコメントする形式で進められた。

(1) つくりものの起源とその展開に関しては、従来考えられてきたような民俗学的祖形ばかりでなく、中国・朝鮮からの直輸入的要素が強いのではないかという指摘がなされ、今後の研究に向けて新たな方向性が示された。

(2) 近世の都市文化とともに発達した祭礼におけるつくり物とその変容に関しては、最も個別研究が進んでいる分野である。各地方で行われている祭礼に即した詳細な報告がなされ、中心から周辺域、あるいは地域間でのつくり物文化の伝播の様相が明らかにされている。また、見学会において、実際に祭礼を調査しながら異なる分野の研究者間で意見交換を行うことができた。今後必要とされるのは、これら祭礼におけるつくり物を総合的な視野からとらえていくことと、都市芸能(能・歌舞伎)と祭礼・民俗とのつながりを考えていくうえでのキーワードとして、つくり物をとらえていく作業である。

(3) 中国、西洋など、日本以外の地域におけるつくり物との比較という問題は、その対象となる領域が広範すぎるため、いまだ不明な点を残す結果となった。少なくとも、つくり物は日本固有のものではなく、

その起源を他のアジアにたどれるものも多い。また、西洋にある同種のものの中には、基本的に同じ構造をもつものも多いが、多くの事例を挙げるのは困難であった。今後は、これらの問題を明らかにしていくとともに、日本におけるつくり物文化の展開の特質がどこにあるかを究明していく必要がある。また、つくり物に多く見られる異国趣味(唐子など)の要素も重要な問題である。

(4) つくり物研究の方法論的問題は、従来の聖なる山、あるいは依代といったシンボリズム中心の研究では、もはや限界があるという点で意見が一致した。つくり物の研究は、ことばとして表されたつくり物(文献資料からの分析)、描かれたつくり物(主に後世の絵画資料からの分析)、伝承されたつくり物(現在行われている民俗行事からの分析)などを総合的に考察することによって、より実証的な研究の段階に到達すると思われる。特に、今回の研究会においては、文献資料の綿密な考証によって、新たな知見が実際に得られた点が意義深く、今後の歴史研究者による当該分野の研究が期待される。また、絵画資料からの考証も同じく有望な方法である。このほか、祭礼の担い手である人間の側からの現実的な必要性が、つくり物の生成を規定する側面があることも指摘された。これらに加え、いわゆる美術遺品とつくり物との比較検討も、有効かつ重大な課題であるが、両者を直接的に結びつけるためには、これまでの「美術品」の概念からもれてしまっていたさまざまな造形を丹念にすくい上げていく作業が必要であろう。